

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 栗田 秀法
論文題目 プッサンにおける語りと寓意

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 木俣元一
委員 名古屋大学 教授 伊藤大輔
委員 名古屋大学 教授 藤木秀朗
委員 日本大学 教授 木村三郎

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、17世紀フランスが生んだ最大の巨匠ニコラ・プッサン(1594-1665年)の1630年代から50年代半ばまでの物語画を考察対象とし、説話表現において造形的・視覚的なレトリックを駆使して寓意的な意味内容を喚起する画家の一貫した志向性の在り方を解明するため、図像的な先行作例や着想源を特定する手続きを経て構図の生成過程を再構成し、個々の作品の詳細な分析を通じて、いかなる修辭的技巧によって画面に寓意的な内容が呼び込まれているかを明らかにすることをめざしている。

論文全体は、対象とする作品の制作年代に応じて、3つの部分に大きく分かれる。

第Ⅰ部では、1630年代初頭に画家が寓意的な内容を絵画に織り込むため独自の物語叙述の手法を開発していった過程について論じる。第1章は、《幼いピュロス王の救出》(1634年)を主たる対象として、準備素描から完成作に受け継がれなかったうずくまる女性像に着目することで、完成作だけでは窺い知れない画面構想の錬成の軌跡に光を当てる。第2章は、枢機卿フランチェスコ・バルベリーニのために描かれた《エルサレム落城》第二作(1635年)を取り上げ、ローマ皇帝の凱旋入城図像の導入、ローマの将軍ティトスの天に向かう視線などによる寓意的内容の表出、教皇権力の優位性というテーマを論じる。

第Ⅱ部では、1630年代後半におけるプッサンの絵画で顕著となる思索的傾向を新ストア主義との関連で考察する。第3章は、画家の重要な支援者ポール・フレアール・ド・シャントルーの注文による《マナの収集》(1637-39年)を扱い、アリストテレスの『詩学』における「逆転(ペリペテイア)」の演劇理論に対応する奇跡の描写と、時間的に奇跡の前後にあって前景左右で対置される「慈愛」のテーマの分析から時間構造の二重性を解析し、発想源として当時の新ストア主義の著作に見られる「恒心」の主題を指摘する。第4章は、ルーヴル美術館所蔵の《アルカディアの牧人たち》第二作(1638-40年)で画面右端に立つ女性像を「知恵」の擬人像の系譜と関連づけ、新ストア主義思想の文脈に置く。

第Ⅲ部では、おおよそフロンドの乱(1648-53年)の時期に重なる1640年代末から1650年代半ばまでの作品を、不安定な政情を時代背景とした絵画における語りと寓意という観点から詳細に読み解く。第5章は、《エリエゼルとリベカ》(1648年)を対象に、類例の少ない特異な場面選択を「逆転(ペリペテイア)」と結びつけ、神の恩寵が担う役割という寓意的次元がいかに視覚化されているか検証する。第6章は、古代ギリシアの不遇の政治家フォキオンに関わる2点の作品(1648年)に基づき、「運命のいたずら」と「時の真実」という寓意的主題を浮彫にし、プッサンにおける物語画と風景画の役割にも言及する。第7章は、《コリオラヌス》(1652-53年頃)に登場するローマの女神をミネルヴァと関係づけ、戦争と平和の寓意、逆境で求められる美德の寓意を読み取っていく。第8章は、新約聖書に取材した《キリストと姦淫の女》(1653年)、《サフィラの死》(1652年頃)、《足萎えの男を癒す聖ペトロと聖ヨハネ》(1655年)という3点の作品を扱い、各主題の教訓を物語とともに提示する試みを考察する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文では、膨大に蓄積されてきた先行研究を十分に咀嚼した上で、とりわけオスカー・ベッチュマンが『プッサンの絵画の弁証法』(1982年)で提示し、『美術史的解釈学入門』(1984年)で確立した方法論的問題意識をキーゾルやアングローブらによる最新の研究成果も貪欲に取り込んで先鋭化・精緻化するとともに、版画、素描、絵画などの図像資料及び文献資料の幅広い渉猟を通じてこれまで指摘されてこなかった着想源の特定や画面構成の生成過程の再構成に関わる着実な研究実践と結びつけ、従来見過ごされてきた物語画に寓意を織り込む造形的ロジックに注目して画家の志向性と豊かな絵画世界を詳らかにすると同時に、「ホモ・レトリクス」としてのプッサンを歴史的展望の中に一貫性と整合性をともなって現前させていることが非常に高く評価できる。

以下、このような評価を例示するため、本論文の学術的成果の一部に言及する。たとえば第1章では、《幼いピュロス王の救出》に関して、準備素描と完成作の緻密な分析によって、それまで概念的な対比に留まっていた極限状況におけるペリペテイアの場面の描写を強化するため、とくにラファエッロの作品に由来する「パトスのイコン」を女性像として導入した構想の変化と、説話表現に道徳的教訓性の伝達を招来する手法について明らかにしている。また第3章では、《マナの収集》における奇跡の前後における美德の行為の対置について、フェリックス・テュールマン、マックス・イムダール、ジョナサン・アングローブらによる先行研究を踏まえ、当時プッサンが親しんでいた新ストア主義の著述家ピエール・シャロンの『知恵について』(1601年)で重んじられた中庸の主題との関連を指摘し、造形的レトリックと寓意的内容の一体的関係への展望を切り拓いている。さらに第7章では、《コリオラヌス》における武将の表情を当時の情念表現のコードと照合することで、彼が祖国愛から我に返り正気に戻る場面だとし、ローマの女神を平和の女神とする新たな解釈とともに、平和への希求と新ストア主義で重視された剛毅と節制という美德を「新しき配置」によって前景化する本作の意味構造を解き明かしている。

このように全体として高く評価できる論文であるが、プッサンの書簡が彼の思想を跡づける重要な論拠として引用される際に、オリジナル手稿との照合作業を経ず校訂版に依拠しているところや、《マナの収集》など1630年代のプッサンの絵画に対して、1660年代のフェリビアンのもものとされる発言に現れる「ペリペテイア」の概念を適用する妥当性に関わる検証が、トルクアート・タッソの著作を援用しているもののやや不十分であるなど、一部問題となるような点も指摘される。しかしこのような不備は、筆者の今後の研究によって補われ得るものであり、本論文の価値を大きく損なうものとは言えない。

以上により、審査員一同、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと認定した。

論文審査の結果の要旨